

これまでの会議における意見

※構成員の発言や提出された資料をもとに事務局にて意見をまとめたもので一部文言等の補足をしている。
※第3回目の意見を赤字、その後送られてきた意見を青字で記載。

【不登校対策のアプローチ】

- 北九州市の目指すところ、理念として掲げるところは基本的にどこなのか、力を合わせる方向はどこなのか、と考えたとき、私の個人的な意見としては「社会的自立」が良いのではないかと思う。学校に行くことができなくても、その時間に自分のできることをする本人を支え、励まし、否定せず、多様な場や活動を用意し、いつか社会に出ていく人として、家族も学校もかかわっていくことができれば、理想なのではないか考えるから。
- 文部科学省の去年12月の通達で、「学校復帰ではなく、社会的自立を」というふう
に文言を改めたが、私の実感としては、学校というものをなくして、本当にその子が人生
にあたって自分の幸せな人生をつくりあげる社会的自立ができるのか。学校がなくても、
例えば職人として生きていくとか、家業が好きで、家業を継いでいくとか、昔の徒弟
制度の中で成長できる子はよいのかもしれないが、多くの場合、やはり学校復帰、学校
に通うことは大事ではないか。
- いろんなパターンを想像しながら、基本は学校に行くことだろうと、私は正直思っ
ている。学校でいろんな人間関係を学び、友達関係をつくり、そして、それが社会に出
て行くときに、我々の社会生活の基盤となっていると思う。ただ、病気だったりとか、先
ほど言われたようにコミュニケーションがなかなかとれなかったり、不安が強い、いろ
んな事情があって行けない子どもさんたちがたくさんいるのは事実ですので、その子た
ちに合った環境づくりというの、やはり考えていかないといけないと思ったときに、
よく今言われるように、多角的な目で見ていかないと、学校だけの問題だとか、先生だ
けの問題だとか言っていては、いつまで経っても解決しないのではないのかなというの
が私の印象。
- 家から一歩出て、社会（人の中で過ごす）経験ができる北九州市に。家の外に、社会
のどこかに、受けいれられる場が必ずあるような北九州市に。（SDGs ゴール17）
- 不登校に関する予防的な取組も大事であるが、不登校になっている児童生徒が既にい
るので、そちらに重点を置きながら議論できれば良い。
- 子どもが行けない学校環境があるのか、家庭環境に課題があるのかなど、広い視点で
対応を検討していく必要がある。

- フリースクールに行くのも良いとは思いますが、将来子どもが社会に適応できるようにすることを考えると、学校に行くことが基本だと考えている。
- ICT を活用した不登校対策の在り方について、今年に関しては、指導主事が本来業務以外の時間と労力を使って授業をしているとのことだが、これを持続可能にするためには、どのようなやり方がいいのかというアイデアが必要だと思う。児童生徒が、どこで見ているかも重要。学校の中で別室の部屋で見ることができるといことが望ましいのではないかなと思う。ICT 活用に関連して別室が充実するということが、すごく重要だと思う。

【児童生徒の状態に応じた支援の在り方】

- コロナ禍の状況で、分散登校の時期から学校に登校できている子どもがいる。その子が言っているのは、「今の学校の対応やリズムが自分には合っている」、「行けなくても罪悪感を持つ必要がない」、「みんな不安なので、自分も話に入れた」、「会話のテンポがゆっくりで優しい」、「先生も優しい」、「みんなマスクを着けているので楽だ」、「みんな自分のことで精一杯なので、見られている気がしない」など。今「誰一人取り残さない」ということは、学校であっても、どこであっても自分の居場所がある環境に身を置きたいと子どもは、感じ、思っているのではないかなと思う。
- この子の場合はこのアプローチが有効なのではないかという振り分け機能をどう組み立てていくのかというのが大事な作業になる。
- 子どもが1つのパターンに適応できなかった時に、教育を受ける権利が保障されない状況になってしまうことが多いのではないのか。学び方も多様性があるといいのではないかなと思うので、この件も今後検討していくことができればよい。
- 家で休養する時期が過ぎ、心身の健康が整ったあと、家から出てどこかに行こうとする、誰かに会おうとする、そのきっかけや場を用意して、義務教育後の社会的自立につながるよう、希望をもって生きていけるよう、自分なりの一歩を認めることができるよう、そのための経験ができる場を用意できたら良い。
- 全ての不登校の子どもが勉強が好きというわけではなく、それこそ学習障害などがある中で、「勉強だけはもうどうしても嫌だ」という子どもはいる。百人いたら百様の、そういう子どもへの対応の仕方というものを研究し、学校の先生とその知見と実践のあり方を研修等で共有できれば、今よりも不登校の数を減らせるのではないかな。

○ 「そんなに苦しいなら学校に行くのはやめて、行きたいときに行くタイプのフリースクールの方がいいじゃないか」と言う方もいるが、毎日行くほうが子どもは楽。最近「週に1回の登校でいい」という小学校の指導をしているような場面が少し多くて気になっている。週に1回登校してみようと言われた小学生にとっては、今日頑張ったのに、「1週間後」にまた行かなくてはならない、一週間に一回、つらいことが待っているという状態をつくってしまうケースが多い。毎日、担任の先生に出席をとってもらって帰るといふ短時間の登校の方が、子どもにとって、生活習慣づくりと積み重ねていく自信につながるのではないか。一見理解のある週一回より、毎日を目指す、そういう対応の仕方というのが、大事じゃないかと思う。

○ 状態像別に

(0) 登校はできているものの、学校生活への不適應感が強く、苦痛を感じつつ学校生活を送っている。

(1) 家にいる以外、どこにも外出できない状態

(2) (短い時間でも) 外出ができるようになる状態

(3) 卒業後の進路と支援のつなぎ

●保護者が登校に対して消極的な場合

◎対応として

(0) このような児童生徒を SUTEKI アンケートで見つけ、保護者とともにかかわりを考える。

(1) 安心して過ごすことができる家庭環境にする。心身の調子を整えるよう、家庭では生活リズムや食事に配慮する。心のエネルギーを貯める時期。この時期は、特に家族へのサポートが大切。

(2) 学校においては、柔軟であたたかい受け入れ体制を整え、短時間でも身支度をして登校できるような環境を準備する。別室登校した児童生徒の活動内容を充実させることができるよう、各学校で工夫を重ねる。「明日も来たくなる別室」にするよう工夫する。教育的・発達促進的でありながら、多様で、やや枠のゆるい、他者とともに楽しい体験のできる活動の場が大切。学校外の方が希望であれば、少年支援室を利用する。別室にも少年支援室にも行くことができない児童生徒に対しては、定期的な学校のかかわり（SCを含む）が重要。

(3) 中学校の時に不登校だった生徒が入学しやすい高校、そのような生徒が入学した後に継続しやすい高校や、外部相談機関へのつなぎ。学校からは親身で具体的な情報提供。希望をもって次のステップに進むことができるよう、励まし、見通しがもてるようにする。

○ 中学校にはその後の進路が待っているのに、学力保障とそれから進路保障というのが、一番の大きな課題である。子どもは、自己評価というのは、ものすごく低いとい

うか、褒められていない、認められていないところがあって、そういう体験をする別の部分もあると本当にいいなと思う。例えば、ワラビーキャンプ等で、そこから復帰するというのは、人の役に立ったとか、ご飯をつくった時に人の役に立つとか、そういったことが自分の基盤になるので、世の中が求めているのは、例えば大きな震災が起こったときに、ボランティアが足りないとか、今コロナ禍でそれは無理なのは分かっているが、現場に行き、人の役に立って、その土地の全く見ず知らずの人から認められる、そういう体験する部分も両軸で必要ではないかと思う。

- 人の中で生きていける。それから、社会体験、役に立つ感覚、そういったところ、感覚や経験、そして自己肯定感を高めて希望を持って、自分の将来を考えていく力、それをどこで私たちは本人たちに体験させる場を保障できるのか。もちろん、勉強は大事だと思うが、勉強をした力を活かすには、人の中で、世の中で生きていく力がないと、勉強した力も活かせないと思う。
- 不登校が長かったという子どもたちに効果的な学習カリキュラムやプログラムの開発を検討していただきたい。
そして、オンライン授業が始まって、例えば、一人でオンライン授業を受けることができる子どももいるし、先生たちの支援が必要な子もいる。ノートテイクがとても難しい子どももいる。そういう子どもたちの支援も必要になってくる。授業は流れていくので、そういうところのサポートも必要になってくると思う。
- ICT と不登校に関して、技術的なものなど難しいと思うが、担任の先生がやっている授業等を、ICT で見られて、この先生はこのように話すなど、印象が分かったら、行きやすくなると思う。

【学校関係機関の取組】

- 学校の先生が家庭訪問を行ったり、授業の時間の中でいろいろな作業をされたり、大変だと思うので、量が足りているかという検討も必要ではないかと思う。
- 教職員自身の力量と言われた時に、コミュニケーション能力かと思う。保護者はたくさん求めることが多いが、何か問題が起きた時に、コミュニケーション能力をしっかりと持っていて、こちらがいろいろ聞かなくても、ある程度流れだけでも教えてくれれば安心するという保護者の意見をよく聞く。
- 今までリーダーシップと言ったら、校長が「こうやるんだ」で、それで進んでいたところがあるが、校長だけでいく場合と、保護者を交えていく場合とでは、また内容が変わってくる。本当に一人一人を大切にするのであれば、一人の考えでの判断に委ねずに、

みんな集まって、それぞれの困り感を共有するという事は、それで全てが解決に結びつくことはないと思うが本当に大事な事だと思う。

- 学校によっては、保護者を含めて先生方とチーム体制で支援をしていく体制をつくるのが難しいこともあると思っている。学校によって取組の差が、かなりあると感じているので、その点も検討できるとよい機会になると感じている。
- 横浜市の「ハートフルルーム」のような校内適応指導教室の役割が充実することによって教室にも行きやすくなり、また教員も家庭訪問せずに学校に来ている子どもと話ができる。このような校内適応指導教室的取組が比較的できている学校もある。
- いくら大人が会議で話して、大人が子どもを受け入れる場をつくっても、子どもが受け入れてくれる状況がないと、なかなか教室に入れない。道徳の授業なども活用しながら、子ども同士の声かけなど子どもが子どもを巻き込んでいけるような指導に徹底していただけたらよい。
- 中学校は卒業したら終わりという状況だけにつくらないで、その子にあった、例えば、単位制高校やフリースクールなど、いろんな形を模索していきながら、その生徒自身が立ち上がった時に相談する場所として、また受験を可能にする場所として、窓口をずっと開いておくことが重要。
- 子どもに経験値を踏ませるために、そっと見守るということよりも、まず教師や親が出て行って解決策と方策を練って、そこで手立てを取ることが多くある。本当はもっと前の段階からその経験が必要。
- 発達に応じた自立に向けた自分をコントロールする力、生活習慣や社会性、耐性、対人スキルなどの「社会適応力」を伸ばしていくことを日々学校で取り組んでいくこと、それから子どもと子どもがしっかり繋がっていく、居心地のいい空間をつくるってところは学校がこれからますますがんばっていかねばいけないところである。
- 40人の生徒を持っていて1人が不登校になった時に、39人の授業や学活を成立させるために日中動けないというのが、1つのネック。もし加配的な要素を持たれた教員が配置されれば、個別対応で、家庭訪問して、それがきっかけになって復帰する場合もあるので、マンパワーというのは一番大きい手立てではないかなと思う。
- 別室を有効活用することによって、不登校になる人が少なくなればよいといつも思っている。
別室を居心地よくするのは、多くの教員から「反対」と聞く。別室が居心地よくなっ

たら教室に行かなくなる、でも教室の居心地がよくなって、別室さえも居心地が悪ければ、もう休むということになる。

- 学校をサポートしてくれるスタッフや地域の方に学校内の別室にいていただき、その方はいるだけで、指導は先生方が担うような場の提供はどうか。
- 別室でうまくいっている事例を見ると、学校全体、全ての先生が、その別室登校の子たちに関わっている。例えば、山形県のある中学校では、別室登校用の時間割がある。全ての教員が自分の授業の空き時間を利用し、別室登校の子どもと関わる時間を最低でも週に1時間もつ、というような校内体制を作りあげた。
その学校には、別室が何箇所もあり、校内に点在しているが、休み時間になると生徒は来る、先生は来る、とにかく人の出入りが多い。最初から人に会いたくないという子どもの場合は個室も用意しているが、とにかく先生も生徒もみながコミュニケーションを持てるように工夫を凝らしている。
- 私は遠隔授業にあまりいいイメージを持たず、反対の立場だった。しかし、浅川中学校の校長先生から、「別室登校をして、そこから授業を見ているけれど、子ども達には、それで止まることなく、まずは別室で学校にどんどん慣れていって、そして教室に戻れるようにしたい」という話をお聞きし、いかに柔軟に教室復帰へのきっかけをつくるかが重要だと反省した。ゲーム依存だった子が、「授業が遠隔で受けられるよ」という誘いから、学校に来られるようになったという別室の様子も実際に見学させていただいた。ゲーム感覚で授業が受けられるということに魅力を感じる子にとって、素晴らしい試みで、私の生徒もこれなら学校に引っ張れるかもと思える実践だった。どの学校でも遠隔授業の別室対応ができるかという、予算、適材適所の指導者の配置等を考えても、そう簡単ではないと思うので、拠点校、モデル校をつくり、「そこに行ってみよう」という子どもがいたら、通学区を越えた対応をし、子どもに自信がついたら、原籍校に戻るといったような柔軟な学校復帰への個別対応を北九州市でぜひやってもらいたい。
- (フリースクールについて、) 校長や担任の意識で学校の対応が違っている場合がある。見に来てくれる学校の人もあるが、完全に任されている場合もある。
- 不登校児童生徒について「わがまま」「甘えている」という視点でなく、本人理解を深め、相応しい支援を模索する雰囲気を作ることが求められる。そのための研修や実践紹介等が重要。
- 担任がその子どもの成長を見守るという日本の学校教育文化というのは、簡単に変わるものではない。日本の学校教育のよさは担任制にあるのではないか。この担任を中心として、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーという周りでサポートし

ていくことが必要だと思う。担任の先生が動けないときは代わりに家庭訪問したりというのは、もちろん手段としていいとは思いますが、やはり担任の元に不登校の子どもが戻っていくという目標を大事にしていくことが、日本の学校の良さで、これからも守ってほしい学校文化だと思う。

- 相談のプロの教師、プロ中のプロというのをコーディネーターとして育てていただきたい。そういったコーディネーター養成講座というのを北九州市でやっていただきたい。学校の校長先生たちに生徒指導の重要性を理解していただいて、養成講座は将来の北九州の学校のリーダーを、若い先生の中から育てるという目標のもと行ってほしいと思う。
- 本市は、スクールカウンセラーの配置時間が他都市より充実している。この課題に対するスクールカウンセラーの活用方法も大切な視点の一つだと考える。不登校に関係する全ての段階で、スクールカウンセラーを活用できる。
- 外部の専門家を入れれば入れるほど、教師の指導力は下がるというのが、適応指導教室を開始する際、またスクールカウンセラーを導入する際にも、かなり国で議論された。しかし、学校の先生の負担を考えたら専門家を入れようという流れになったと思う。チーム学校として、うまく働いている学校と、ダメな学校との格差は大きく出ているのが現状だと思う。スクールカウンセラーの数を増やして、不登校が減るかということそれは非常に難しいのではないかと。上手くコーディネートできるリーダー的存在が学校の先生の中にいるかが鍵となる。生徒指導コーディネーターが学校現場に必要なと思う。
- 社会への適応を目指して、まずは学校への適応を目指して取り組んでいくが、学校というシステムそのものに馴染めない子どもがいる。学校とは別の社会的居場所 (another) が必要であり、適応指導教室の充実はとても重要。「学校へ行く」のとは違ったタイプの教育・適応支援機関を公的に柔軟に展開できるとよいと思う。

【学校関係以外の機関における取組】

- 適応指導教室の充実というのも非常に重要。
- 少年支援室に登録した後、通所できなくなって、保護者からも連絡が遠のき、それから電話でのリターンもなくなってくるというケースがある。母親が1人で抱え込んでしまって、諦めて面倒臭くなり孤立してしまうケースが大きなケースと捉えている。
- 適応指導教室について、行政的に教育委員会がサポートする方がやりやすい部分はあるのかと思ったが、20歳までの子どもたちの対応もあるということであれば、子ども家庭局が管轄される方がやりやすいのか、そのあたりも検討してほしい。

- 少年支援室について、スタッフの皆さんが、専門的な知識や経験がない中でも、子どもたち、保護者、家族のために、心を砕いて学校と連携を取りながら頑張ってくださいているが、名古屋の「フレンドリーナウ」に伺った時に、心理職のスタッフがしっかり数が確保されているという印象があった。今後、適応指導教室、少年支援室の中に、そういう心理職のスタッフの配置というようなことも検討いただきたい。
- 少年支援室のスタッフのさらなる充実や、少年支援室を教育委員会管轄にしていいただくことも期待。
- 本人ないし親御さんが「外部の相談機関に相談できる」素地が15歳までにできていれば、それ以降の支援は、すてっぷ、YELL、サポステ、ワークプラザ等の若者支援機関で担当することが出来る。
 - ①継続的に外出できる状態であるとよいため、子ども達がコンスタントに外出できるように各学校に別室登校の教室があったり、別室登校児童・生徒への対応マニュアルを教育委員会が作成してもらおうとよいと思う。
 - ②親御さん面談は重要と考える。ただ働いている親御さんが多いため、土曜日・日曜日に面談が実施できるように、少年支援室の業務時間の変更や親御さん面談を実施するために心理士の常勤化が望まれる。
- 支援室の場の提供ということ、学校には提案している。学校の垣根が高いという子どもとか保護者がいるので、三者懇談の場の提供や、担任、スクールカウンセラーの面談の場の提供をしている。それから、担任の先生が制服を持ってきて一緒に関わっての卒業写真の個人の写真撮り等もやっている。学校との垣根を低くするというのは、とても大事と思う。
- 適応指導教室でも人が多くて適応の難しい子どももいる。民間のフリースクールだと特色を持たせられるし、行政に不信感をもっている保護者もいるので、民間だから選ぶという場合もあると思う。
- 行政と民間との連携をより深くしていくことが重要であると感じている。公立学校の先生とお話をしていて多く挙がってくる話として、「公立学校がどこまで生徒・保護者・家庭へ入っていいか判断に迷う」、「あまり入れない、伝えるべきことが伝えられない」というものがある。その中で、民間だからこそできることがあるのではと考えている。その逆も当然あり、公立しかできないこともある。それぞれの役割を理解し連携をとっていくことで、お互いが補完し合える体制ができるのではないかと考えている。
- フリースクールに関して、今後の課題として児童・生徒の在籍学校との連携をより積

極的に行っていくことが挙げられる。フリースクールの目標は在籍学校への復帰だが、保護者はフリースクールに通わせていることに満足しがちで、その先の見通しが立てられていないケースが多いと感じる。児童・生徒の学習や活動についての情報共有を学校と密に行い、先生方からもご意見や要望をいただきながら、在籍学校を中心とした児童・生徒への支援を行っていきたい。

- 京都のあるフリースクールでは、すぐ近くの中学校とタイアップして、理科の授業はフリースクールではなく、その中学校に行って、中学校の理科の先生から授業を受けるということを実践している。そういった経験が子どもを高校進学へと実際に導いている。
- コロナウイルス感染症による休校中に、家庭での勉強も含めてオンラインでの支援をZOOMで2ヶ月ほど行った。よかった点が多かったなという印象。直接対面する前に、画面をとおしてワンクッション置いたような状態で、どんな子がいるのかというのを距離が離れたところから見られたので、心の準備ができたという声がたくさん上がった。また、学校に行けない時間が長くて、学校に行きたくなったという声が沢山あって、休校明けにかなり登校率が上がったということも見られた。
家でやるので、画面には映っていないけれども、隣に保護者の方がいらっしゃってどういう授業をしているかで見られていた方も多かったようで、私たちの授業や、どういう思いでやっているのかを知っていただくきっかけになったところが収穫になった。課題としては、生徒のインターネットの環境が違うことや、教員自体もオンラインでの授業に慣れていないので、その点は課題と感じる。
- ひきこもりや就労など部局を横断して若者たちの支援を行っているのが、北九州の若者支援。この若者支援のやり方で、今の学齢期の子どもたちに何かよい経験やフィードバックができればよい。
- 全て病気ではないのは承知の上だが、医療機関のサポート、特に精神科が必要な場合、外来通院の児童精神科の子どもと関わってくださる先生の少ないことや、もし入院加療が必要になった時の入院施設もなかなか難しい。
- 市民センターや地域にある事業所・施設でも、どこかに居場所を感じられるような仕組み作りと発信が行政に期待される。
- 例えば、宿泊体験は、1泊「ミニワラビーキャンプ」にし、もっと気軽なものにするなど、今回の話を聞いて、北九州市においても、できそうなことを模索していくきっかけをいただけたと思う。
- 学校を抜きにして関わってくれた大人というのは今もすごく覚えている。だからそう

いうふうに関わろうとしてくれた人たちがいることは、すごくありがたかった。

- 公立学校が、どこまで生徒や保護者に関わって良いか判断に迷ったり、伝えるべきところがあまり伝えられなかったりという教員の話をよく聞く。フリースクール等は、民間だからこそ一歩引いた第三者的なところから、少し突っ込んだ話ができると思う。民間だからこそできないことも逆にあると思う。そのため、お互いの足りないところを補完し合って、連携し合っていければ、誰一人取り残さないというところで、力が発揮できるのではないかと考える。民間の活用もしていただければと思う。
- こじれてしまっただけからの支援室への面談が増えてきたことを感じる。学校へ行っていないだけでなく、周囲が対処を間違えると、それが原因でより深刻な状況になっている。子ども自身が、自身の存在の価値を見出せず、追い詰められ、家庭内暴力やリストカット、神経症、うつ状態、依存症、無気力、起立性調節障害、自律神経失調症などが二次的に出てきて苦しい状態になっている。そういった子どもは支援室に通うことすら難しい状況がある。医療関係のサポート、特に精神科が必要な場合、外来通院の児童精神科の子どもと関わって下さる医師のサポートがあればと思う。

【家庭への支援】

- 家族が子どもに対して学校行くということを一生涯に言うあまりに、子どもとの関係が悪くなったり、また子どもが追い詰められたりとか苦しんで、また保護者が学校に行かせたいがための言葉が逆に子どもを学校から遠ざけてしまう、そういう話もあるので、この家庭への支援というのは、とても重要だと私も思う。
- 学校に行けず、学校との接点が少なくなった場合、保護者や家族が主に本人に関わることになる。その方たちがどんな願いや、どんな対応で子どもと関わるかというのは非常に重要だと思っている。そのため、保護者や家族が子どもの将来に希望を持つことを応援ができるようなサポートや相談機能も大切。
- 大きな集団が苦手など精神面の影響で不登校になってしまう子どももいるが、生活習慣が整わないことによって、朝起きられない、頭が痛い、お腹が痛いなど病気で学校に連絡が入るパターンというのがたくさんある。
保護者が例えば、「学校に行きなさいよ」と声を掛けて子どもを家に置いて働きにいった、連絡がつかないといったことが増えている。
この対応を考えると、家庭への支援というのが非常に重要だと思う。しかし、学校の人員にも限界があるので、福祉の方でもよいので、それぞれの地域の中で、家庭、保護者への支援に対応してくれるポジションの人が欲しい。

- 家庭で身に付けるべき基本的な習慣などが身につけていない子どもがいるので、保護者への指導が必要な場合がある。
- いわゆる家から出てこない子を、どうやって学校のほうに連れて来るかといった時に、「市民センター、校区に1人ずつぐらい、学校に連れ出してくれるスタッフがいるといいよね」と言っている状況。
- 親にとって、厳しい指導だけではなく、親自身が虐待など苦しい子ども時代を経験してきたケースもある。そういう親の話聞くカウンセリングも非常に重要だ。ただ、相談機関は土曜日はやっても、日曜日は開いていないというところが多い。
 埼玉でも例えば保健センターが、ひきこもりとかいろいろな相談を受けているが、土日はやっていない。本当は家庭訪問も、土曜日や日曜日のほうが子どもに会いやすく、親も何となくゆったりしていて、話をする余裕があることが多い。経済的に考えても、仕事を休めない親のために、土日あるいは平日でも夜間対応をしてくれる相談機関が必要だと思う。これは人を増やす、あるいは勤務時間帯を弾力化できる体制が必要だと思う。そういったときに、特に精神科医の方々のアドバイスを受けられるということは貴重だと思う。学校現場の先生方にとっても、例えば児童精神科医とお話ができる機会などは、診療が忙し過ぎてそんなチャンスも滅多にないという実状もある。行政として1番困っている人たちに対応できる。相談ができる場所、土日対応というものを、お金はかかるかもしれないが、検討してほしい。子どものうちに助けられたら、その子の人生は変わる。またどれほど親も楽になるかと思う。
- 幼少期から小さな失敗や過ちを自力で乗り越える経験をさせない、転ばぬ先に杖を突きすぎる保護者や、子どもが学校でトラブルを起こしたり失敗したりすることを嫌って子どもを責めたり他者を責めたり、子どもが訴える困り感に向き合うことから逃げたりする保護者の姿勢がある。社会の構造、世論、空気そのものを変えていかねばならないことかもしれないが、親教育はとても難しいが、支援できるとよいと思う。

【子どもの育成に関して】

- 多様な経験や生活習慣、対人スキルを付ける、社会性を伸ばすなど、社会に出ていく人としての適応力を伸ばすという視点で大人たちが子どもを育てていくことによって、結果的に不登校を少しでも減らすことができる。
- インターネットゲームへの依存が昼夜逆転に繋がっている。仲間と思っている外部の人たちと繋がって、過度にのめり込み、自分をコントロールできなくなってしまっている。外部と繋がる時間帯というのが、夜中1時から4時の間で、そうなると、自分のコントロールができなくなって昼夜逆転してしまい、学校に行けない、起きられない、学

校に通えないとなる。

もう1つは、携帯電話やスマートフォンへの依存。具体的に言うと、悪口を言われているかもしれない、書かれているかもしれない、話題に乗り遅れたりするかもしれない、友達と話が合わないということで、夜眠ることができない、そして勉強が手につかない、こういう子どもたちが増えている。

- 大人もスマートフォンやゲームをする中で子どもだけゲームを禁止するのは子どもに不公平感を持つのではないか。子どもたちの世界をもっと大事にした対応をしなければいけない。
- 精神疾患の医療刑務所で出所する時の支援を調整する時に思ったことが、学校に行けていない方々がいるということ。そして居場所を求めて、社会の中でいろんなことに依存してしまい、男性や薬物に依存するなど自分の居場所を見つけていきながら、それが結果犯罪につながっている。だから不登校と犯罪の関係は、実証はできないと思うが、不登校に介入していくことも犯罪の未然の予防につながると思う。
- 集団の中で学ぶべき勉強というのは、いっぱいあると思う。オンライン授業は確かに今の時代に大切かもしれないし、不登校の子にとっては大切かもしれないけれども、それだけに集約して安心してしまうのはいけないと感じる。不登校の児童生徒の学習をどうするかというのも大切だが、少しでも集団の中に入るような模索を常に我々大人は考えていかないといけない。社会というのはやはり集団活動の基本だから、どうしてもそこではじき出されてしまう。
- 広義のキャリア教育と表現したらいいのか、生き方の教育としたほうがいいのかかわからないが、その部分を強調していかないと印象を受けた。